

## 「わたしの杯は溢れます」

私達はかつて羊飼いだっただビデの書きました詩篇23篇を毎週、みております。今日はそのうちの5節にあります「わたしの杯はあふれます」という一節に注目したいと願っております。まずは詩篇23篇全体を拝読させていただきます。

1 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。2 主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。3 主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。6 わたしの生きているかぎりには必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

読んでお分かりのようにこの『わたしの杯はあふれます』というのは、これまで見てまいりました、その前の言葉とパッケージとなっています。そう、主は私達に敵対するような人や私達を悩ます事を前にしても、そのところで安心して、再び力を得ることが出来る、憩うことすらできる宴を私達のために備えてくださいます。さらには私達の頭に油、すなわち先週お話ししましたように聖霊を注いでくださるというのです。この聖霊の油注ぎにより、私達は己が能力や権勢ではおよぶことができないう上からの力をいただくことができる。私達には到底、不可能と思われる御霊の実を結ぶことができる者とされるのです。

話しておりまして興奮してきます。なんとすごいことを主は私達のために備えてくださっているのかと。しかし、それはまだ続きます。そうです、敵の前に備えてくださったその宴において、主は私の前にある杯を満たしてくださる。否、満たすだけではない、それは溢れるというのです。今日はこの「杯が溢れる」ということについていくつかの事をお話しします。まず最初に皆さんにお話しすることは「溢れる恵み」ということです。

### 溢れる恵み

イエス様の愛弟子ヨハネはイエス・キリストがこの地上にお生まれになったこと、すなわちあのクリスマスの出来事を深い洞察力をもって書き残しました。

14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。  
15 ヨハネは彼についてあかしをし、叫んで言った、「『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』と

わたしが言ったのは、この人のことである」。16 わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた (ヨハネ1章14節-16節)。

ヨハネは創世記に記されていますように、この世界は神の言葉によって創造され、その言葉が肉体となり、すなわちイエス・キリストとして私達の間に宿ったのだと書きました。

ヨハネは実際に3年半、イエス様と寝食を共にしました。その日々を振り返り、ヨハネはイエス様に間近に接し、そこに神のひとり子としての栄光を見、そのみならず、このお方には神の恵みが満ちいて、その恵みが溢れんばかりに私達にも注がれているのだと書き残しました。

同じ学校であいつとは三年、共に野球部でがんばったとか、あの人は会社の同僚で何年も辛苦を共にした、あの人のことは私が一番、よく知っているなんて友人を皆さんはお持ちかもしれません。しかし、そんな友人に対して「あの人は神の栄光をあらわし、恵みとまことに満ちていた。彼からあふれ出たものによって、私はどんなに大きな恵みをいただいたことだろうか」などという人物評をする人はいません。ヨハネが言っている言葉はまさしく、人間を超えた存在だけに対して向けられるべき言葉なのです。

少々、世的な話となりますが、ここでダビデが言っています「わたしの杯は溢れます」ということは、日本的に解釈するのならこういうことになるのではないかと思います。日本の赤提灯の店や屋台でお酒を注文しますと、目の前に空っぽのコップが皿の上に置かれてお客の前に差し出され、そのお客の目と鼻の先で、そのコップになみなみと、溢れるまでお酒が注がれます。その時のお客さんの顔はどんな顔でしょうか。注がれるお酒から目を離さず、ゴックンと生唾を飲み込みながら、コップの縁からあふれ出ていくお酒を嬉しそうに、うっとりとしながら見つめているに違いありません。その日の苦労も確かにありますでしょう。しかし、その時だけはそれらを忘れ、ただただ注がれ、溢れるものだけに思いは向けられているのです。

もちろん、イエス・キリストの恵みはお酒ではありません。またそれはその時だけの慰めではありません。しかし、イエス様からあふれ出る恵みが私達の前にこのようになみなみと注がれている様を見るということは、私達にとりまして大きな喜びなのです。実際のところ、目には見えませんが主の恵みは私達の杯に今も注がれており、それは溢れているとダビデは書いたのです。私達はこのことを知っていますでしょうか。二つ目のこと、それは「溢れる恵みに気がつく」ということをお話しします。

溢れる恵みに気がつく

## 2016年8月28日(日) 私の杯は溢れます

主が満ち溢れんばかりに私達に恵みを注いでくださること、それは「本当だろうか?」ということではなくて、既に主は今も私達に溢れんばかりの恵みを注いでくださっているのです。ということは、私達にとって大切なことは、私達がそのことに気がついているか、否かということです。

私達がよく言いますように、私達の心には簡単に「不満」、「不平」、「不足」、「愚痴」が混入してきます。それに対して私達は「感謝」すべきことを見出すことをほとんどしません。「不満」、「不平」、「不足」、「愚痴」の存在は圧倒的で、感謝すべきことに私達が気がつくことはありません。同じように神が私達に与えてくださっている恵みは既に溢れているのに、私達はそれに気がつくことがありません。

私達はそんな「不満」、「不平」、「不足」、「愚痴」を持ち合わせつつ、幸いな人生を送ることはないだろうと思います。これは確かなことでしょう。ですから、どうかそれらの思いを心からなくそうと努力します。がんばります。しかし、それを心から拭き去ることは容易なことではありません。私達が見ること、聞くことから、これらのものは次から次へと私達の心にわいてくるからです。

ですから不本意ではありますが、私達はこれらのことを生涯、持ち続けていかなければならない可能性がおおいにあります。しかし、もしこのことから免れることを願いますのなら、私達は主が私達の杯に注いでくださる溢れんばかりの恵みに気がつくことです。私達の目の前で、なみなみと注がれ、そこから溢れ流れている神の恵みに目を向けることです。

私達は一人一人、神様から命をいただき、与えられている年月、すなわち人生があります。ここにいる皆さんの数だけ、この人生にも違いがあります。その違いはどこからくるのでしょうか。もちろん、生まれ育った環境や、その後の諸々の経験というものが現在の私達に大きな影響を与えることでしょう。

しかし、実際に私達の人生に大きな違いをもたらすものがあるとするなら、それは劇的な出来事や大きな決断ではなく、それは「私達が主の恵みに気がつく」ということなのです。私達はそのために残業する必要はありません。そのため特別な講習を受ける必要はないのです。

使徒パウロの生涯は諸々の試練に満ちた生涯でした。そのような意味で彼が聖書に書き残した言葉は苦勞を知らない者のたわごとではありません。彼はキリストゆえに受けた試練の数々を書いています。そう、それはあつという間に不平、不満、愚痴が心に満ちてしまうような状況です。しかし、彼はそこに目を向けるのではなく、それらを圧倒的に凌駕して彼の上に注がれている神の恵みの豊かさに目を留めたのです。

彼はその書簡の中で好んで「あらゆる」「どんなことでも」「さらに」「はるかに」「すべて」「・・・を超えて」「はかり知ることのできない」と言うような言葉を用いて神の恵みの豊かさを讃えています。あたかもその神の圧倒的な恵みが彼の不平、不満、愚痴を押し流してしまったかのようです。その溢れている恵みゆえに、それらのものは既に彼の視界に入っていないのです。

私達はいつも「あれさえあれば」とか「こうでなければ」というような思いと共に生きています。しかし、私達はこのような思考から抜け出て、神の恵みに目を向けるように自分を整えていかなければなりません。「あれさえあれば」「こうでなければ」は止めどもないものです。止めどもないと言いましたのは、一つのことを達成すれば、その後にはまた別の「あれさえあれば」「こうでなければ」という囁きが私達の心に聞こえてくるからです。

私達が主の溢れんばかりの恵みに気がつき、そこに目を向ける時にこれらの思いは主の恵みによって押し流されてしまうのです。それは幻を見るとか、夢想家になるということではなく、実際に既に神が私達に溢れんばかりに与えてくださっているものに私達が気がつくということなのです。三つ目のことをお話ししましょう。それは「必要が満たされる」ということです。

#### 必要が満たされる。

使徒パウロはピリピ人への手紙4章でこうも述べています。19 わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであらう。20 わたしたちの父なる神に、栄光が世々限りなくあるように、アメン（ピリピ4章19節－20節）。

主の恵みは溢れんばかりに私達に注がれると同時に、パウロは神はご自身が有する栄光の富から私達の一切の必要という杯をキリスト・イエスにあって満たして下さると言いました。そう、パウロは言うのです、「私の神は私の一切の必要をキリスト・イエスにあって満たして下さるだろう」と。これは本当なのでしょうか。

アメリカ人のクレジットカードのローン額は一家族あたり、数千ドルにもなるといいます。そうです、クレジットカードはお金がなくても買えるという魔法のカードです。しかし、言うまでもなくそこには大きなリスクつきまといまいます。このことゆえに破産してしまう人の数は膨大です。

私達は物を買う時に自らに問うべき「あの質問」を知っています。そう、「それは、あなたが欲しいものなのか。それともあなたに必要なものなのか」という質問です。パウロはここで「あなたの欲する一切のものを」とは言わずに、神様が私達をご覧になって「私達に必要な一切のもの」と言いました。私達はこのところを間違えて受け取らないようにしなくてはなりません。

確かにこの言葉に従って私自身の人生を振り返りますと、主は私の欲しているものを一切くださるお方ではありませんでした。そのことは確かです。しかし、振り返ります時に主は私が必要としているものは一切、くださったということをおもうのです。

この「必要」には深い意味があります。時にその「必要」は私達にとりまして「チャレンジ」となるものもの含まれるからです。「かわいい子には旅をさせよ」という言葉は、その子が旅をして、そこで直面する諸々の苦勞が我が子をよく知る親としては、この子には「必要だ」ということです。その子は快適な旅をしたいでしょうが、思いどおりにいかなくなるのが旅であって、しかし、そのような経験がこの子には必要だという親心をもって、「かわいい子には旅をさせる」と私達は言い伝えてきたのです。

主は私たちの必要の一切を満たしてく下さるお方です。そして、このことに気がつく時に、私達の人生は変わります。最後に「恵みが注がれる余地」ということについてお話しします。

#### 恵みが注がれる余地

私のお気に入りの某ハンバーガー屋さんに行きますと裏メニューがあります。裏メニューとは公に掲示されているメニューには記されていないのですが、それをオーダーすれば受けてくれるというまさしく裏のメニューです。ところで私達の人生にも裏メニューがあることをご存知ですか。それはあまり私達が見聞きしないものです。そのような意味で私達の前に隠されているものと言ってもいいかもしれません。今日は特別、皆さんにそんな人生の裏メニューをお話しします。それは「多く与える者は多く与えられる」ということです。この裏メニューに今から3000年前に生きましたソロモンは気がついていました。そう、こういうことです。

24 施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。25 物惜しみしない者は富み、人を潤す者は自分も潤される（箴言11章24節－27節）。

そして「ソロモンよ、あなたがいたった思いは正しいことなのだ」と、それを裏づけるようにしてイエス・キリストは言われました。

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるであろうから」（ルカ6章38節）

## 2016年8月28日(日) 私の杯は溢れます

ソロモン、イエス・キリスト、そしてパウロもこの裏メニューを見出してこう書き残しました。

6 わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。7 各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。8 神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである（コリント第二の手紙9章6節—8節）。

パウロはここで「わたしの考えはこうである」と言っています。そうです、そこにはパウロの経験が含まれているのです。実際に表のメニューでこのような考えを見聞きすることはほとんどありません。しかし、パウロはソロモンやイエス様の言葉を受けて、彼らの言葉は本当だろうかとこの世界を観察したに違いありません。そして、実際にそれに生きてみたに違いありません。そして、分かったのです。ですから彼は自分自身の結論として「わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」と言ったのです。

私達を取り囲む自然環境には法則があります。その法則は確固たるものです。その中には植物や動物が互いに命を与えあって生きているという法則があります。自然界では生き物の死は、次なる命のために不可欠なものとなります。死ぬことにより、他の生き物が命を得ているのです。これが自然界の法則です。このことなくして私達の生きる自然環境は成り立ちません。そして、その法則を私達人間の生き方にも明らかにしているのがイエス様のあの言葉なのです。

24 よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。25 自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう（ヨハネ12章24節）。

これは種をもつ食物に当てはまる法則です。種から芽が出るということはその種の死を意味します。しかし、その種が死ぬことにより、種からは芽が出て、実が実るのです。これ以外に実りはありません。このことは人間にもあてはまります。そのことをイエス様はここで言っているのです。私達もかき集めるのではなくて、それを与える、地に落ちて死ぬということをするのなら、そこから驚くべき実が結ばれるというのです。

「私の杯は溢れます」ということは「無条件に恵みが注がれます」ということと同時に、そこには「私達が手離すことによりさらに注がれる」ということが含まれる

## 2016年8月28日(日) 私の杯は溢れます

のです。すなわち、満ち溢れるためには、その杯が空でなくてはならないということです。

よく教会で食事をしていまして親切な方がお茶を入れてくださいます。そこで取り交わされる会話はいつも同じです。「お茶いかがですか」「ありがとうございます。でも、まだありますので」。そう、確かにコップにはまだお茶が残っています。せっかく持って来ていただいても入れる余地がないのです。

もし私達が手に何かを握っていたら、どうして他のものを掴むことが出来ましょう。しかし、それを手離すのなら、そこには次なるものを握ることができるスペースができます。その開かれた手に主は溢れんばかりに祝福を注いでくださいます。イエス様はその様を「おし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして」とまで言われたのです。

私達は与えられた一度の人生、一粒の麦のまま、そのままこの地上での人生を終えるのでしょうか。その種は地に落ちることなく、どこかに置かれたまま、誰にも見出されずに一粒のまま、そこにあり続けるでしょう。

今日の午後、試みてみてください。夜まで手を握り続けてみてください。辛いでしょ。疲れるでしょう。もしかしたら今、私達が抱えている虚しさや疲労感私達が手をかたく握り続けている生きてるところからきているのかもしれない。私達の体は無意識のうちに手を広げて生きるように作られているように、私達はその手を開き、神様の溢れんばかりの恵みをいただくことができるように造られているのです。主の前に手を閉じて何かを握り続けているのなら、どうしてそこに神様は恵を注いでくださることができましょうか。

今朝、私達は聖書の言葉からこれからの人生を全く変えてしまうような、すごいことを聞いたのだと思います。主は私達に溢れんばかりの恵みを注いでくださっています。しかし、私達はそれに気がつかずに生きています。もし、このことに私達が気がつくのなら、私達の心からは喜びと感謝がわきあがってくるでしょう。神様は私達の一切の必要を満たしてくださっているということに気がつくのなら、私達の心には喜びと感謝がわきあがってくるでしょう。私達が手離し、与えることにより、神様はさらに私達を祝福してください。この裏メニューを知り、確かにその通りだということを私達が経験して行く時に、私達の杯が溢れんばかりに満たされていくことを私達は日々、目の当たりにするでしょう。このような神の祝福に満ちた生涯、それは遠くにあるのではなく、私達の手の届く、すぐ目の前にあるのです。お祈りしましょう。